

幼稚園教育の獨自性に就きて

目白幼稚園 和田 實

家庭教育の缺陷を補ふことが、幼稚園教育本來の使命なるかの如く、考へて居る人が、世間には、相當に、ある様である。斯る考へを以て居る人から見ると、幼稚園の存在性は、主として、不完全なる家庭の存在に、依存する様に考へられる様だ。即ち、幼稚園は不完全なる家庭の缺陷を救済する一つの補助機關の様なものと思はれる譯である。従つて、斯る考への人から見ると、幼稚園獨自の立場を云ふものは全くないことになるのであるが、幼稚園は、果して、教育的に獨自の立場のないものであらうか、幼稚園令の第一條には幼稚園教育の目的として次の三項目が擧げられて居る。

- 一、幼兒身心の健全なる發達を計り、
- 二、善良なる性情を涵養し、
- 三、家庭教育を補ふを以て目的とす、

上記明記してあるが、此の三項目が各獨立して、都合三個の目的を以て居るものであるか、夫れも、第三項が前の第二の兩項を包括して居るものであるか、即ち幼稚園教育の目的は三つであるか、一つであるか、文章の上からだけでは一寸不明である。従つて、條文の上からだけでは、之を判斷することは不可能である。併し、虚心坦懷に、法令を通讀した時には、此三項目は並立して幼稚園教育の目的として差支ない様に見える。果して然りすれば、何も、家庭教育を補ふことだけが、幼稚園教育の目的ではないと云ふことになるから、別に、幼稚園教育は幼稚園獨自の立場に於ける任務を持つて居ると見ても差支ない様である。

併し、第三項が幼稚園本來の使命で、前二項は第三項中に包括されるものと見るに、幼稚園教育は家庭教育に從屬すべきものなるので、其獨自の立場を云ふものは認められる餘地のないものなる。果して、何れが、眞理だらうか。

又、世上知名の士は云はるゝ人々の言説を記憶にたぎつて見るに、幼稚園教育は家庭教育の延長であるに、考へて居る人が相當に多い。時には、幼児教育指導の任にある人迄が、此思想に捕はれて居る人がある様である。斯る人々の思想から見るに、幼稚園教育は、何等獨立の立場を有せざることになるのであるが、吾人は之を疑ふものである。

延長を云ふ意味には二つの場合がある。一つは繼續の意味である。幼稚園教育は家庭教育の繼續であり、小學教育は幼稚園教育の繼續であり、中學教育は小學校教育の續きである。延長の意味を此意味に採るのなら何等差支ないことで、幼稚園教育も小學校教育も、中學校の教育も各其繼續中に各獨自の立場を以て、各其教育理想を打立てることが出来るのであるが、延長の意味を他の今一つの意義に解するときは然うは行かぬのである。今一つの意義は主義方針の延長即ち主權の延長を云ふことで、法律的用語としての意義を持たせた場合である。此場合に於ては、幼稚園教育者は各家庭の主義方針に追隨して、其教育を施さねばならぬことになるので、到底、自家、獨立の主義方針を立てることは出来ない。一にも二にも各家庭の御意見を拜承して行かねばならぬことになる。實際に斯る馬鹿氣たことの出来るものでないから、此解釋は採る可きものではあるまい。斯様に考へて見るに、名士の所謂、家庭教育の延長を云ふ意味は何んな意味か、頗る曖昧なもの云はねばならぬ。所が、此頗る曖昧な意味が、殆んぎ、眞に受けられて、關西の某幼稚園では、幼稚園を家庭らしくすることに、大に、努力せられて、室内は疊敷に、先生は袴を脱して、着流しの帯をお太鼓にして居り、先生と呼ばさずに、お伯母様、お姉様と呼ばせて居る所があるを云ふことである。幼稚園教育者の無主義、無定見、無頭腦も、此處迄來るに、寧ろ、一種の滑稽を感じるのであるが、世間は盲目千人である。名士の御迷説を、此處迄信仰して居るものが相當に多いのであるから、困つたものである。

或は又、就學以前の教育は、家庭の責任である。云ふ建前から、幼稚園教育を以て家庭教育中に包含せらる可き性質のものに、解釋して居る人もある。併し、是れは又、頗る空漠な思想で、幼稚園教育が、家庭教育から、未だ分派しなかつた時代の思想を其まゝ生かして居る、所謂、未開思想で、今日、既に、家庭教育中から幼稚園教育なる特殊の施設が分派した以上は、其本來の使命如何を検討して、幼稚園独自の立場が認められるならば之を的確に認識して、其使命を完全に實現せしむるべきが、吾人教育者の職業的義務ではあるまいか。是を今更、夫れのなかつた昔に返して、幼稚園の存在を無視する様な言論を敢えてする云ふことは、文化指導者たる責任ある名士の言動ではあるまい。

要するに、幼稚園教育を以て、家庭教育の補助機關、又は代理機關であるかの如く、考へて居る人が、世間には相當にある。そして、幼稚園独自の立場を認めない人が相當にあるのは概はしいこと云はねばならぬ。

幼稚園教育は、決して、家庭教育の延長ではない。之を幼児教育の延長云ふのは差支ないが、家庭教育の延長云ふのは當らない。幼稚園教育は幼稚園教育として、家庭教育の主義方針に煩はさるゝことなき、独自の立場を有する立派な教育機關である。

然らば、幼稚園独自の使命果して如何。一言にして、之を盡せば、幼稚園教育は幼児教育の家庭的雰圍氣より脱出せしめて、之を郷土化せしむるものであると信ずる。

元來、幼児の生活云ふものは、年と共に其活動の舞臺を擴大して來る。幼兒滿三歳もなれば彼等の活動は、最早、家庭の狭き天地に踞踏す可き性質のものではない。幼兒の活動慾は家庭内の凡てものを遊び盡くして、今や、園外に逃れ出で、街頭に進出し、遂には郊外に迄活躍せんとして居る。其生活はより大なる天地に擴大せんとして居る。此生活の擴大慾に應じて、其生活を擴充せしむるべきが、幼稚園教育の施設の一つであらねばならぬ。斯く云はゞ、人或は云ふかも知れない、何あんだそんな事、そんな事は家庭でも出来るではないか、人を雇つてすれば富裕な家庭ならば出来ることだ

こ。然り、然うに違ひない。併し、是は一般の家庭には出来ない。そこに、幼稚園の使命がある。

次に、家庭教育は個性發展が主である。早期に於ける幼児の活動云ふものは、極めて、個人的である。所謂、傍若無人の活躍を許されて居つた。幼児は何等己れの周圍に顧慮するところなく、自己の自由なる活動を恣にすることが出来た。併しながら、世の中には自己の個性以外に別個の個性がある。又人生の行路には一つの軌道がある可きだ。個性の行動云ふものは、無制限に奔放なる自由を許すことは出来ぬ。人は一定の人生軌道に乗り、別個の個性を尊重し之を衝突することなく、共存共榮の道をたざらねばならぬ。此處に個性は社會的陶冶を経なければならぬ。此個性の社會的陶冶は、前の生活擴充と共に、幼稚園教育の家庭教育に對して有する他の一つの独自の立場を見る可きものである。是は如何に富裕な家庭も、家庭教育で、出来るものではない。此處に幼稚園独自の立場は嚴存する。

併し、幼児の生活を擴大することも、郷土の範圍を超越した大きな擴大ではない。社會的陶冶にしても、郷土的範圍に於て充分に之を達成することが出来る。畢竟、幼児教育は、家庭教育より郷土教育迄擴大して行く所に、幼稚園の使命がある。換言すれば幼稚園教育は、幼児教育を、家庭的雰圍氣より郷土的雰圍氣の中に移す所に其使命を有するものを見ねばならぬ。一言にして云はゞ幼稚園教育は、幼児教育の郷土化にあり云ふことが出来る。幼稚園は決して、各家庭の教育方針に追隨し、自己の立場を忘れて、之に阿ゆする必要はない。

尤も教育の郷土化云つても、幼稚園に於て、完全なる郷土教育を施すものも考へては早計である。郷土教育を完全に行ふものは小學校の教育である。完全なる郷土教育は、體育にも、知能教育にも、將又、道德教育にも關係が深く、眞に價值的教育を施すことの出来るものであるから、中々幼児教育の範圍に屬する幼稚園教育だけでは到底、充分な教育の出来可きものではない。併し、幼児教育が教育の郷土化を計るに計らないことは、小學校教育の郷土化的效果の上に大なる差異を來すことは想像するに難くはあるまい。

是に於て、人或は疑ふかも知れない。何事の科學的教授の出來もしない幼児教育が、何うして郷土教育が出来るか、郷土の自然に就いて、何が教へられるか云ふのか、郷土の史蹟、地文に於て、何等の知識が如何にして與へられるか、不審に堪えない様だ。幼児教育を理解しない人云ふものは、直ぐに教授の有無で教育の價値を定め様とする傾きがある。教授の研究を以て、教育學の生命として居る現在の教育社會では無理からぬ疑問であるが。幼稚園の教育は、現在の教育學以上に教育の方法を研究して居る。現在の教育學では、徳育上に於てのみ情意の直接陶冶を認めて居るが、幼稚園教育では體育に於ても、知能教育に於ても、情意の直接陶冶を認めて居る。幼稚園は何等の知識教授をしない。何等嚴格なる學習作業を課さない。然も、郷土を愛し郷友を睦みて、身心の郷土的執著を、より深く、より堅く、結成せしむることに於ては或は小學校の教育よりも、より深く大なるものがあらうかと思ふ。此誘導的教育の方法は、現在教育學の等閑に附する處で、幼稚園教育者の常に深く、研究する所のものである。

世の小學校教師が、幼稚園教育を理解し能はざる所以も、主として、現在の教育學が、此誘導的教育方法を研究せず、従つて、之に關して教授せらるゝこなき師範教育の缺陷に職由するものと云はねばならぬ。